

# われはなにになり

—かげろふ日記作者の世界—

岡 本 恭 子

## 一、序にかえて

さだめなくきえかへりつる露よりも

そらたのめするわれはなにになり

新婚三日目のきぬぎぬの文に対しての、作者のおもいを込めた返歌である。「しのゝめに おきける空はおもほえであやしく露ときえかへりつる」とうたいかける兼家の歌は平凡だが、それでも新妻との別れのせつなさを伝えている。しかし作者のものは、若き新妻というよりも結婚生活の彼方を見てしまった冴めた目を感じてしまうのである。「あるかなきかの心ちする」人生を経験した今、この歌を詠じたというのなら納得もできようが、少くとも結婚への夢、期待というものを持っていたであろう新妻がうたいかけることに、思わず立ち止まってしまったのである。

更級日記作者が若い頃に「盛りならば容貌もかぎりなくよく、髪もいみじく長くなりなむ」、そうなれば「光るの源氏の夕顔、宇治の大将の浮舟のやうにこそあらめ」と思いつづけた。しかし、それが「いとほかなくあさまし」と知ったのは、作者自身による人生経験の結果であったことはいうまでもないことだが、かげろふ日記作者にとっても「かしはぎの木高きわたりより」の求婚に、それなりの夢や期待をもったはずである。

今日のような恋愛とは異なるかたちではあるが、婚前になされる文通は一種の恋愛期間だと考えられるので、特に和歌の往来は、今日のラヴ・レター以上の意味をもったと考えてよいだろう。和歌のもつ虚構性を通して真実の情をこぼ手繰り寄せる、そして相手の声に耳を傾けようとする。これは現実に向き合うよりも確かな手応のある愛として受け止め、いわゆる恋愛感情を昂揚させ、かつ楽しんでいくのである。とくに女性の場合にはそれが強いはずだし、かげろふ作者もただ「まめぶみかよひ」をするという儀礼を踏襲するだけの女性

ではなかったはずだ。むしろ作者の方が楽しんでいたように感じられる。

さて、作者は結婚した。その時の様子を見ると、「まめぶみかよひく／＼、いかなるあしたかありけむ」と、つまり作者は結婚を「いかなる」という一語に集約してしまうのである（この点について後で触れることになろう）。再び冒頭の和歌にもどると、新婚三日めにしてすでに「ものの要にもあらである」人生を、作者は見通していたというのであろうか。またこの歌にこめられた作者の心情はこのとき一回限りのものであったのか。そうではなかったと考える。

「われはなになり」という問いかけが、作者の生涯かけての問いかけでなければ、「めづらしきさまにもありなむ」とした作者の思いが浮び上ってこない。また単なる「身の上をのみするにき」であっては、「天下の人のしなたかきやと、とはんためしにもせよかし」にはなり得ないのである。しかし、その問いかけの答を作者自身がかつと見窮め、かつ提示したか否かを知るには、決して充分とはいえない現存の『かげろふ日記』の中から求めるより方法はないのである。また作者の周辺を見ることによって、逆に作者像を知る手掛りともなるが、なんせ作者の最も身近にいたはずの一子道綱からは反射する光は届かない。なぜならば彼自身「一文不通之人」という茫漠たることばの彼方にいるからである。

作者の「身の上をのみする」ということは、作者を中心とした身の上を赤裸々に述べ、ということばではないのである。ではどのような考えのもとに「身の上をのみする」としたのかを見ていきたい。

## 二、「身の上をのみする」とは

作者自ら「かげろふのにき」とすることを命名し、その内容についても「身の上をのみする日き」であることを前提とした。このように明示する背景には、冒頭の一節である

世中におほか(る)ふるものがたりのはしなどをみれば、世におほかるそらごとだにあり、人にもあらぬ身の上までかき日記して、めづらしきさまにもありなんとするところにあると考えられている。

作者が「ものがたり」でなく、日記体で書くことと差し示したのは、少くとも作者が知り得た「ものがたり」の虚構性を否定するということであって（誤解のないようにあえて傍点を付す）、現実生活を現実のものとして書く、そこには嘘のない世界があるのだという姿勢を示すことであった。いわば作者の文箱にある日記帖を公開するというのだから、これは画期的な執筆姿勢といえよう。作者の見た「ふるものがたりのはし」が、如何ようなものであったかは判らないが、大方のところは想像できる。そして、その中にある「おほかるそらごと」の意味を最もよく理解したのが紫式部であって、彼女は源氏物語の中で、「文学論」的な型で「そらごと」の意味づけをしている。

さて、かげろふ作者の文箱にある日記を公開するということは、作者が裸になるということである。更に「身の上をのみする」と言っているから、作者を中心とする関連人物についても触れなくては

ならない。ところが多くの頁には封印がなされているようで、それが作者の意志によるものか、それとも時の経過のせいかわ分ることはできない。ただ作者自ら「すぎにしとし、つきごろのこともおぼつかかりければ」とする弁解があるので、必ずしも正直に「かき日記して」いるとは考えられない。

作者は『かげろふ日記』を書くに当って、「世におほかるそらごと」に対する挑戦のみならず、もう一方では「天下の人のしなたかきやと、とはんためしにもせよかし」とする意味づけを示した。この「とはんためし」の解釈だが

㉞ 世人が門地の高い人の生活はどんな風か知りたい時、その例にもしてほしい<sup>㉞</sup>

という考え方。ほぼ同じ意味あいであるが、

㉟ この上ない高い身分の人に嫁した女の生活はどんなものなのかと尋ねる人がいたら、その答えの一例にでもしてほしい<sup>㉟</sup>

とするのか。また

㊱ 私の生活が果して高い貴族の妻としての生活かどうか批判する例にもなれかし<sup>㊱</sup>

と解するのか。(㉞)はほとんど同じであるが、(㊱)では少し違う。ここで考えることは解釈の正誤についてはない。つまり作者は「〇〇の答え」の「ためしにもせよかし」とするのか、「〇〇の批判」の例としてほしいのか、あるいは判断とする材料にしてほしいというのかという考えに立っての解釈としなければ、作者の真意を掴むことができないと考えたからである。なぜこの一文に拘るのかというと、作者が「われはなになり」の答を、「めづらしきさまにもあ

りなん」とか、「とはんためしにもせよかし」という言葉に置き代えていると見たからである。作者は言った。

思ふやうにもあらぬ身をしなければ、こゑあらたまるもよろこほしからず。猶ものはかなきをおもへば、あるかなきかの心ちする、かげろふのにきといふべし。

人生の結論を提示したかのような発言ではあるが、これでは答になっていないのである。ことばを変えれば「ふるものがたりの」、「そらごと」に対しての「めづらしきさま」だけでよいのだろうか。「天下の人のしなたかきやと、とはんためしに」対しても、やはり「めづらしきさま」としての問題提起がなされなければならぬのではないかということである。

作者は「身の上まで」という範囲の限定を、更に「身の上をのみ」と強調限定した。そこには作者と兼家を軸とする「身の上」であって、二人は別々の軸ではあり得ず、常に二人は同じ方向に回転しなければならぬという考え方が作者の根底にあった。であるからして父や子について語ることはあっても、あくまでも兼家と自分という一本の軸の回転する中にある父であり子であるという考え方に立っていることに気づくのである。ここでは紙面の都合上四人の人物と作者の関りを考えてみたいと思う。

### (1) 桃園の尼と作者

作者が「身の上をのみする」事柄から離れたのは、高明左遷とその妻についてと、佐理と妻の出家についての二点である。高明事件

について触れるとき、「身の上をのみする日きには、いるまじきことなれども、かなしとおもひいりしもたれならねば、しるしをくなく」と、一応の筋道をつけて語ろうとした。作者が心底から同情を寄せたのは、高明室（愛宮）、のち桃園の尼上といわれた女性に対してであった。作者は、この尼上の心情を「いみじ」の一語で表わした。高明が都を去って三日目に邸が焼け、愛宮は桃園別邸へ移り「いみじげにながめ給ときく」が、この自分も「いみじうかなし」の限りであるというのである。この時の作者の方にも「さわやかにもならねば」とする心理的に「うつ」の状態にあったことから、尼上と自分を重ね合わせて一層の「いみじうかなし」へと追いやるのである。そこで作者は尼上の心情に添って長歌を詠む。侍女であろうか、「まへなる人みつけて、いみじうあはれなることかな。これをかの北の方に見せてたてまつらばや」と進言した。ここでの「いみじうあはれなることかな」は、長歌の出来栄えについて誉めているというだけのものでなく、むしろこの「まへなる人」にも、「いみじうあはれ」と感じる事柄を知っているゆえの、「いみじうあはれなること」として発言したものと考えたいのである。

作者は尼上に歌を贈るとき、「いづこよりとあらば、多武の峯よりといへ」と自分の名を伏せて尼上の兄の名を使ったのである。この行為は「いみじうかなし」とする情を伝えることよりも、歌を贈る手立てを、また相手の反応を想像しながら楽しんでる様子が感じられる。返歌はその日の中にといいわけにはいかなかったが、相手は贈主をまちがえなかったのである。しかし、返事を携えた使者が「もてたがゑて、いまひとつところへもて」行ったというのであ

る。作者の目はどこへ向けられたのか。まちがいとも気づかずに受け取り、しかも「かへりごと」までしたという「いまひとつところ」の女性（時姫だろう）に対してである。使者の文を「とりいれて、はたあやしもや思はずありけん、かへりごとなどきこえてけり」とすることばの中には、まさに興ざめの一語につきるものである、とする作者の口吻が伝わってくる。一方尼上はわが方の手落ちに気づき、されど同じ返歌をすることもできずに、ただ作者が「いかにこゝろもなく思ふらん」かと騒いでいるということを決れ聞くと、ますます興を催したとする。そこで作者は「さきの手」で再び歌を贈るが、尼上は慎重に「たしかなるたよりをたづねて」返歌をしてきた。こうした歌の往来を作者は楽しんでいたのである。ここには作者の「いみじうかなし」とする愛憐の情をもった姿も、また「かなしとおもひいりしもたれならねば」とした姿もない。ただ情趣の世界に遊ぶ作者のもう一つの顔がクローズアップされてくる。それにしても「いまひとつところ」の様子や、尼上のうろたえぶりなどをいち早く耳にするということは、われわれの想像できないところに情報網を敷いていたらしくて驚かされる。

## (2) 父と作者

作者は自分の結婚や出産の記述は省いても、思い入れの深いものの記述にはそれなりの筆の運びがあり、また荒々しく感情を筆の先にぶっつけながら書く場合もあって、そうした作者の感情の起伏が随所に伝わってくる。思い入れの深いものといえば(1)の場合もそう

であるように、いま一つは父倫寧についての記述がある。倫寧との別れは、結婚間もない作者にとってはとりわけ思い入れの深いものがあったと思われる。

さて、涙ながらに別れたのは倫寧が陸奥国へ赴く時のことであるが、これが受領生活最初のものかどうかは厳密には把握できない。

作者の兄といわれる長能が言うには

故伊勢守、河内国さり侍て、いのり申すことやありけむ、丹波になり侍て、そのくにの神にかへり申して侍りけるに

(長能集)

とあるところから、伊勢守が最後の任務であったことが判る。また陸奥国在任期間が、『小右記』によると「五ヶ年」であったらしく、

……雅頼云、滋望倫寧之時、天曆御宇不被免事也、倫寧全勤五ヶ年料金了、年々遺金三千餘兩又辨進者、件事見故殿御日記、

輿所申無相違云々(長元五年<sup>(1032)</sup>八月廿八日の条)

とあって、金産出の任務を果していたことが伺えるのである。

陸奥国以外のことは、ここでは直接に関係あるわけではないが、簡単に触れておくと

(1) 陸奥守 (天曆八年秋<sup>954</sup>) (かげろふ日記)

(2) 河内守 (応和三年春<sup>963</sup>) (公郷補任)

(3) 丹波守 (天祿元年五月十九日<sup>970</sup>) (日本紀略)

(4) 伊勢守 (貞元元年三月廿日<sup>976</sup>) (日本紀略)

となつて、尊卑分脈記載の上総、常陸は確認できない。ただ(2)はあくまでも補任で、正暦三年の条(一)P.233・菅原輔正の項)によると、「倫寧任河内守替」となっている。また彼の没年が貞元二年であつ

たとすると、伊勢守としての任を全うしていないことになる。

さて、かげろふ作者との別れの場面に戻すと、夫兼家について「人はまだ見馴るといふべきほどにもあらず」と言い、それゆえ父との別れが「いと心ほそくかなしきことものににず」ようであったとしている。遠路の受領国への赴任は、『土佐日記』の例を見ても判るように、<sup>④</sup>それなりの準備期間があつたようである。倫寧の場合も春から準備にかゝっていたと思う。適令期の娘を同伴するわけにもいかず、兼家との結婚に多少の不安はあつても、父親としては安堵の思いがあつたとおもわれる。

父との涙の別れをした後の作者は、兼家に対して「目も見あはせず、思ひいりてあれば」とする態度に、兼家は「などか、世の常のことにごそあれ」と言うのだが、それは受領者のつらさを理解できぬエリート官人ゆえのことばであるといふのではなく、兼家の本心はつぎの「いとかうしもあるは、われをたのまぬなめり」にある。自分を頼りにせよ、という意識は兼家の一貫した意識であつたことが、かげろふ日記の中から読みとることができる。

倫寧は娘の後事を歌に託した。兼家は「硯なる文をみつけ、あはれといひて門出のところ」返歌をするのであるが、ここで兼家が「あはれ」と発したのは感動の対象があつたことではなく、むしろ「われをたのまぬなめり」とする思いが強く働いた上での、父と娘への心情を思いやるといった語である。また作者の「目も見あはせず思ひいりて」であるが、父との別れの悲しさのためというよりも、兼家宛の、父の手紙を先に見てしまった照れかくしである。手紙を「ありつるやうにきて、とばかりあるほどに」訪れた兼家

に、作者はどんな顔をして迎えてよいかわからなかったのである。更に意地悪い見方ではあるが、兼家の同情を引きたいという気持ち働いていなかったとはいえない。

さて倫寧の「あがたあるき」に関する記述はこの時のみで、その他受領国への出発はもちろんのこと、帰京に関する作者の喜びの声さえ聞えてこない。「いと心ぼそくかなしきことものにず」と言った作者が、再び書く必要を認めなかったのは、兼家の心が自分から離れてしまったと考えたからで、作者にとつての「身の上をのみ」とは、あくまでも兼家と自分を軸とした「身の上」であり、その軸のバランスが壊れた今、もはや周辺の「身の上」を、深い思い入れをもって語る必要はなかったのである。

兼家の方はどうかという、倫寧に対して「われをのみたのむといへばゆくすゑの松のちぎりもきてこそはみめ」と言った手前もあってか、それなりの気遣いを見せるのである。たとえば作者が倫寧宅へ行くと、必ずといつてもよいほど訪れたり、文で連絡をとるのである。また作者が広幡辺りへ越した後の祭のとき、上達部などの列に入ることに許されていない倫寧の姿を、山吹衣を着ている者どもの中から見つけ出して酒をふるまう、といった気遣いを見せている。この時の作者は「ただその時許や、ゆく心もありけん」と、素直に喜びの意を表わしている。

### (3) 道綱と作者

道綱の官位昇進は他の兄弟たちに較べると遅い。三十七歳でやっ

と参議(正暦元年99)、七年後に権中納言、そして中納言、大納言とこのあたりから速いスピードで昇進していくが、正二位大納言となつたのが四十四歳である(作者は権中納言の息子しか知らない)。

一年ごとに昇進する道綱へ疑問の目を向けた男がいた。藤原実資、『小右記』の著者である。彼はその日記の中で(長徳三年七月九日)、「藤原道綱為大納言(中略)、道綱去年任中納言、下官長徳元年任権中納言、而以道綱被抽任之故、未得其心、若以外舅并大將所被抽歟云々」と、まるで階段を駆け上るかのような昇進ぶりに、道綱およびその周辺に対して「未得其心」と言った。また道綱たちの昇進に対して「今度除目乱世政也」と手厳しい。実資が触れた「外舅」の存在など、道綱周辺に目を向ける余裕をもたないのでここでは省くが、たとえそうした事実があつても、当時の社会通念としては特別なことではなかったのに、あえて実資が語るということは、もっと別の意味があつたことではなかったのか。その点を次の一文と考え合わせてみたい。

道綱が六十六歳の生涯を終えるまでの二十二年間を、正二位大納言のままであるが、彼はそれで満足していたわけではなかったのである。やはり大臣の位を望んでいたのである。しかし最後の階段を上ることなく病没するのだが、それは誰の所為でもなく彼自身に問題があつたらしく、その間の事情を『小右記』はよく伝えている(寛仁三年六月条)。

そもそも事の発端は「左僕射辞退」の噂によるもので、大臣一席をめぐる、道綱はじめ幾人かが希望し、錯綜するのであるから大変である。道綱は人を通して自分の意を入道(道長)へ申し伝え

た。自分は「一家兄也、此度若不任丞相、何恥勝之、只一二月可借給、縦雖無恙不可従事、何況有病乎者」であると。「何恥勝之」といい、「只一二月可借給」といい、己れの死期を悟っていたのか、なんと哀しい申入れであることか。ついに応えてもらえなかったのだが、その理由は「一文不通之人」であるゆえに「未任丞相之故、世以不許」であったと『小右記』は言う。実資は一応同情のこととほも述べるが、やはり大納言の労が二十余年もつづくということ、道綱自身「依是非器也」であったからだと言っている。先述の大納言進云々の記事にも、実資の中にこうした思いがあつてのことと考えられるのである。

では「一文不通」とはどういうことなのか、『古語大辞典』（小学館）によると「文字を一字も知らないこと、無知文盲のこと」とあるが、これは一つの譬喩であつて、道綱がこれに該当するとは考えられないので、次の『源氏物語』を参考に見ればどうであろう。

源氏が夕霧を教育する指針に

才を本としてこそ大和魂の世に用ひらるゝ方も強う侍らめ。さしあたりては心もとなきやうに侍りとも、遂の、世のおもしろなるべき心おきて<sup>⑥</sup>

習うべきであるとした。ゆえに夕霧を「大学の道にしばし習はさむ」と決める。またこうも言う。

たかき家の子として、官・かうぶり、心になかなひ、世の中の榮えに驕りならひぬれば、学問などに身を苦しめん事は、いと遠くなん、思ゆべかめる

と。大方は、苦しい学問で身を苦しめるよりは「戯れ遊びを好み」て、たとえ「心のまゝなる官爵にのぼ」ったところで、「時に従がふ世の人の、下には鼻まじろき」され、つまり腹の中で馬鹿にされるだろう。また「時移り、さるべき人に立ち後れて、世におとろふ末には、人に軽めあなづらるゝ」ようにならないためには「才を本としてこそ、大和魂の世に用ひらるゝ」人となるべきであるというのである。源氏は自分がこの世にいらなくなつても、「世のおもしろなるべき心おきてをなら」つておけば「うしろやすかるべき」であるとして夕霧を教育するのである。

大和魂、つまり政治的才覚を必要条件とするのは当然のこととしても、これほどの条件を満たす人間が「世のおもしろ」となつて活躍したのであるか。源氏物語作者が、「世のおもしろ」となるべき人間の条件を開陳するということは、逆説的解釈をするならば、そうした人間の少なかったことを意味するのではないか。

道綱の「一文不通之人」の意味が、源氏の教育指針と合致するかどうか断言はできないが、一応の目安とはなるだろう。

かげろふ日記作者も、道綱の教育については心を砕いていたことが解る。「私の死後、学問などよく心にいれ、いささかの事をも誤らない文才を、道の博士よりよく習うよう<sup>⑦</sup>」にと遺書の端に書き置いたと記している。その後、健康回復をみたので遺書としての役目を果さなかつたろうが、道綱の教育には力を入れていたことは充分に考えられる。

因に、『無名抄』の中に「基俊は俊頼をば、蚊虻の人とて」とてあつて、この「蚊虻」を「文盲。漢籍の学問に暗いことをいうか」

と語釈が付されている。<sup>⑦</sup>「モンマウ」とよむ例を他に知らないが、『大漢和辞典』（諸橋徹次編）によると「ブンバウ」とあり、右の語釈に類似するような意味はない。ただ「蚊蟲」には「……転じて小人又はつまらぬことの喩」とある。いずれにせよ『小右記』以前の引用例を見つけることはできないが、「一文不通之人」と言われる道綱は「才を本とし」た生活には縁遠い所にいたのかも知れない。大納言昇進の折りの実資の口吻にも、「下には鼻まじろ」く様子が感じられるからである。

さて作者自身に論をもどすと、結婚時と同様に出産時も余分なことばを記さない。女性にとっての結婚・出産は、身の上を語るときには特筆すべき意味をもつはずであるのに、作者はただ

なほもあらぬことありて、春夏、なやみくらしして八月のつごもりに、とかうものしつ

とのみ記し、更に兼家の「そのほどのこゝろばへはしも、ねんごろなるやうなりけり」と、まるで他人ごとのようにであり、母親になった感動どころか、子供の性別も泣き声すら伝わってこないのである。

作者はなぜ省略したのか。「身の上をのみする日記」とはいつても、作者にとつての出産記述は、作者の人生を語る切っ掛けとはならなかったのである。作者にとつては単なる結果の一つに過ぎないのである。解りやすく言うと、音楽でたとえればプレリユードにあたると思えばよい。それも単なる前奏曲ではなく、大きな事件の起きることを予想させる小さなできごとの意としてのプレリユードである。大きな事件とはいうまでもなく「町の小路なる女」の出現

である。また同時に夫の裏切りを意味し、作者の生涯に影を落す結果ともなった。

作者は兼家との愛を諦め、母親になりきろうとしたとは決していないのである。作者の求めた図式は、そこに兼家がいれば共に笑い、共に泣くという中に道綱を置くのであって、道綱と二人だけの図式はない。丁度、冬の日溜りの中に身を置く時の暖かさのようなものを伴と感じ、それを求めていたのである。そうした思いの発露が「三十日三十夜は我もとに」であった。

#### (4) 兼家と作者

この日記の主軸が、作者と兼家の二十余年に亙る結婚生活を語るものであるが、その大部分は作者の神経を逆撫でたとする兼家の言動を語ることにしやすい。一方兼家はどうかというところ、「おしはかる月は西へぞゆくさきは、われのみこそはしるべかりけれ」といったように、自分の変わらぬ心を、言葉を変えながら作者に言い続けている。この歌を裏返しにすると「われをたのまぬなめり」ということであって、兼家としては、頼りにしてほしいという思いが常にあったようだ。しかし、どこまでを頼りとするのか、その許容範囲がわからないのだが、いずれにせよこうした思いは男性の優位性を示すものに他ならない。作者は兼家を信じなかったのである。すでに新婚間もないころ、「人のこころもいとたのもしげにはみれずなんありける」と、旅立つ父親に告げている。なぜ兼家を頼れそうもないのか、その根拠となるべき描写はない。これは次に登場する



「町の小路なる女」の伏線として用意されたことばであると理解されるのである。この「女」の出現は堪えがたい衝撃として、なかく作者の心の疵として残り、同時に作者の人生を方向づける結果となつていくのである。すなわち夫の裏切りによって受けた疵は、夫を怨むことによつて埋めていこうとする女性の心底に潜む懊悩の私たちではなかつたらうか。その後も他の女性について触れるが、この「女」の如き筆遣いはもはや見られない。だからといつて無関心であつたというわけではない。やはり精神の動揺は隠せないでいる。たえず作者の神経は外に向けられ、耳を欬て門外を過ぎる車の音を聞き分けようとする。夜のしじまを破る牛車の軋みは、女の期待を押し潰し、高鳴る心臓の音と一つになつて女の心を重くする。そこには待つ女の哀しい姿が見えるのである。

作者の結婚が、すべて負の面ばかりであつたわけではない。兼家の氣遣い、接し方などが、作者の意になつた時は素直に喜びの声をあげる。また直接的な喜びのことばが見られなくても、それを感ぜさせる饒舌が行間を満たすのである。その一つを例にとるならば、祭見物の雑踏の中で時姫の車を見つけた作者は、わざわざ向い側に自分の車を止めさせる。これは対等の意識表現に他ならない。更に季節に合った橘の實のついた枝に萎かずらをかけて、それに歌を結びつけて贈るといふ風雅さを誇示した。謎めいた作者の上句に對して「やゝひさしうありて」、時姫から「きみがつらさをけふこそはみれ」と返歌された。この時の作者の態度はあきらかに歌における己れの優位性を示すもので、時姫に對して敬意を払つての行為ではない。また時姫の歌の意を汲んだ側近者の話に作者も同意をも

つたと思われ、その日の中に兼家に報告したところ、「くひつづしつべき心ちこそすれ、とやいはさりし」やと言つて面白がつたと、作者は上気嫌に記す。

(1)項でも触れたように、時姫と和歌についての記述は、作者の優位性を示す絶好の機会でもあつたらうが、しかしながら、そのことが女の倅に結びつくものではないと、作者自身がよく承知してゐようだ。兼家の「わが家とおぼしき所」は「あまたの子」をもつ所であるとしてゐる。作者の口癖である「ものはかなくて、おもふことのみしげし」の理由の一つに、「あまたの子」の持てなかつたことであつた。兼家から歌の代作や批評を頼まれても、その満足感は一時的のものであつて、大きな倅に繋がらなかつた。同じような経験に、病氣の兼家を自分の邸で看ることができなかつたことがある。

兼家は「こゝにぞいとあらまほしきを、何事もせんに、いとびんかかるべければ、かしこへものしなん、つらし」と作者に言う。一応慰めのもの言いではあるが、作者はそれに従わざるをえない。まさに「わが家とおぼしき所」でないことを、作者は思い知るのである。作者にできることといへば「日にふたゝび三たびふみをやる」ことしかなかつたのである。それでも健康を取り戻した兼家から「夜のまにわたれ」と迎えられ、自ら「手をとりてみちび」き入れてくれたこと、また精進おとしの料理を二人して食べたことなどの記述に丁寧な筆の運びがあり、一時の倅であつても満足する姿が見られる。

さて作者が真に精神の安寧を感じたのは、兼家没後ではなかつたか。「今はものとおぼえずなりにたれば、なか／＼いと心やすく

て、夜もうらもなううちふしてねいらる」とか、「あさましううちとけたること多くて」といったことばはあるが持続しない。自ら郊外に身を移しながらも、心のどこかに淡い期待をもって兼家を待つのである。「八月よりたえにし人、はかなくて、むつきにぞなりぬるかしとおぼゆるまゝに、涙ぞさくりもよゝにこぼるゝ」と、しやくり上げて泣く姿を、なぜ兼家に見せなかつたのだらうか。

兼家は「我がこゝろのたがはぬを、人のあしうみなして」と言いつづける。訪れたくても「いとおそろしきけしきにおちてなん、日ごろ経にける」と、原因は作者にあるのだと弁解する。あるいは「勘事はなほやおもからん、ゆるされあらば暮にいかに」と、わたしへの勘当はとけたかしら」と、ふざけたもの言いをすることもある。冗談とも本気ともつかぬように「なとか来ぬ、とはぬ、にくし、あからしとて、打ちもつみもし給へかし」と、作者に迫ることもあった。このときの作者は「きこゆべきかぎりの給めればなにかは」と、切口上のことばを返す。丁度、駄々をこねる子供の様子をじっと見ている母親の姿がそこにあり、「あなたの言いたいことはそれだけなの」とでも言いたげである。

いつの時も愛のかたちは一様ではない。兼家は「我こゝろたがはぬ」という。作者の方も作者なりに、手を変え品を変えながごとく愛情表現を行っているのだが。たとえば兼家から「けしきばみ」するとか、「くせくしき」態度がみられるといわれるが、これらも愛情表現の裏返しなのだ。兼家には伝わらなかつたようである。作者が「人のこゝろもいとたのもしげにはみえず」となつていったのはあくまでも兼家にあるとした。

確かに二人は一本の軸ではあつたが、両極に位置するまゝの二人であつて、その距離は縮まり重なりあつて、点となることはなかつたのである。

### 三、むすび

作者は自分をどのように見ていたのだらうか。また作者の生きざまが、「とはんためしにもせよかし」とするに、充分な答を与えているだらうか。

この日記の冒頭に自ら示した執筆姿勢の、「ふるものがたり」の「そらごと」に対して「めづらしきさまにもありなん」とするだけならば、それなりの応え方をしているとは思うが、作者は「天下の人のしなたかきやと、とはんためしにもせよかし」と、大きな問題提起を行っている。そのためには結婚生活の幸、不幸にかかわらず、自らの手で自らを評価しなければならぬはずである。更にいえば、作者は作者であると共に読者でもあらねばならない。それは己れを凝視した結果の答を示すことであり、それがなければ「とはんためし」とはならないのである。それが最初に述べた「われはなになり」に対する答ともなるからである。

さて作者の出産記述に関しては、すでに(3)項で触れたが、やはり結婚についての記述もそれと同じ意味をもつたと考えるが、ただ結婚の場合は、結婚に至るまでの歌の往来に重きを置いているのである。兼家の一方的な求愛であつたとする型を示し、「またくもおこすれど、かへりごともせざりければ」として、結婚に至るまでの

作者の返歌はたったの二首しか載せていないのである。結婚は結果であり、そこに至るまでの、いわゆる導入部を記すことによって、どのような結婚であったかを明示しようとしたのである。

作者は自ら京郊外へ移った。その理由の一つに「すんところはいよく荒れ」だからだとしているが、京の中にあつて、訪れを待つみじめな姿を晒したくない、という一念があつての行動だと考える。また兼家の「れいのところにしげくなんとときく」ことによつて、自分の中で区切りをつける決心がついたと思われる。しかしここに至るまでの精神的動揺は決して単純なものではなかつたことは、作者が繰返すことばの中で理解できる。その振幅の巾を少しづつ縮める過程に、自分の容色の衰えを自覚したり、他人の目を気にすると思ひがあつた。広幡中川辺りへ移るといふことは、兼家との訣別にも等しい行動であつた。作者が傷つかぬ方法は、作者自身身を引くというかたちをとることであつたのである。自尊心の高い女性の、精いっぱい自慰的行動であつたと思われる。しかし、その後も兼家への恨みはもちつづけるし、「涙ぞさくりもよよにこぼるよ」姿のあるのも先に見た通りである。だがこれらはいくまで作者の内面の問題であつて、少なくとも他人の目にはそこまで写らなかつたであろう。むしろ作者の家移りの方に関心をもつたとおもう。

作者は己れと向いあつて、己れの生きざまをしかと見届たのち、この作品を書いたというよりも、書くことによつて自らの気持を落つかせていったと見る。作者の「われはなにになり」は、相手あつての問いかけであつて、相手とひびき合うことによつて、はじめてそ

の答が見つけ出せるのである。人生のすべてを知り得た人間のそれとは異り、作者の場合は、愛を前提としたところにある問いかけであつたのである。

あしよしもしらねど、かくしるしおくやうは、かゝる身のはてをみきかん人、夢をも、仏をも、もちあるべしや、もちあるまじやと、さだめよとなり

この一文は、作者が「我はらのうちなる蛇くちまはありきて肝をはむ、これを治せむやうは、面おもてに水なむい沃るべき」夢を見たことを述べる後文にあたるものだが、作者の意図するところ、すなわち「かゝる身のはては」、「人にもあらぬ身の上」に重なり、「夢をも仏をも(中略)さだめよとなり」の直線上に「天下の人(中略)とはんためしにもせよかし」がある。作者のいう「とはんためし」は、「答」とする「ためし」ではなく、「答」を享受者に委ねる、判断とすることを供することにあつたと考えたい。また作者が筆を折つたことが、兼家との断絶を意味するものであつても、それだけでは冒頭の一文に対しての答とはならないのである。

#### 歌詠する作者の姿を

道綱母は、くらき所にてよみならひたるとかや、いつも燈火をそむけて目をとちて、案せられ侍りなるとなん(『愚秘抄下』)

と伝えている。闇の中で自分の世界を創り上げている作者の神経は研ぎ澄まされていったであろう。これには兼家の訪れを待つ姿に似通うものがあると思う。どんな小さな音にも、またかすかな匂いにも作者の鋭敏な神経はそれを捉え、一喜一憂したであろうと思われる。待つことは想像力を拡大させ、更に恨みを増幅させていく、こ

れが『かげろふ日記』作者の、本当の姿であったのかも知れない。

(引用資料・注)

- ① ① 『蜻蛉日記』 (日本古典全書 P 43-18)
- ② ① 『蜻蛉日記』 (日本古典文学全集 P 125-1 口語文)
- ③ ① 『かげろふ日記』 (日本古典文学大系 P 109-18)
- ④ 『土佐日記』 作者の後任として、承平四(934)年四月二十九日、土佐守に任ぜられた大外記島田公鑒が、任国へ着いたのは十二月も半ばを過ぎていた。『大日本史料』天曆八年の倫寧の記述に、「正月廿五日」と付されているが、その根拠は確められない。やはり遠国赴任はそれなりの準備がいはるはず。
- ⑤ 『源氏物語』(乙女) (日本古典文学大系)
- ⑥ 『かげろふ日記』(同右) (P 178-1-13)
- ⑦ 『歌論集(無名抄)』(同右) (P 56-1-18)

※ 本文引用はすべて⑥と同本である。